

水尾 みづのを 「愛宕山一あたごの鳥居より左の街五十町にあり」

清和天皇社 せいわてんわう 「同書にあり。続日本紀曰、宝龜三年十二月辛未、山背国水雄岡やましらのくにみずのををかに幸す、延暦四年九月庚子水雄岡みづのををかに行幸して遊獵し給ふと。云々」

水尾陵 みづのをのみさぎ 「同所にあり、清和天皇せいわの御骨を藏奉る所なり。民居を去る事四町ばかり西の山腹にして、巡に古松あり」

〔三代実録曰、元慶四年十二月癸未申の刻、太上天皇たじやう円覚寺に崩じ給ふ、春秋三十一。天皇風儀甚美端儼にして神の如し、性寛明仁恕温和にして慈順じじゆんなり、臥立領聞を輟給はず、発言挙動の際かならず礼度に遵ふ、好書伝を讀思ひを釈教に■す、鷹犬漁獵の娯嘗て意にとゞめ給はず、晷々焉として人君の量あり。又曰、同十二月四日夜酉の四刻、太上天皇たじやうてんわうを山城国愛宕郡上粟田山おたぎのこほりあはたやまに葬奉り、御骸を水尾みづのをの山上に置奉る云々〕

水尾山寺 みづのをさんじ 「同所にあり、今荒廢して纔に存す。本尊觀世音、開基詳ならず、當時は清和天皇崩後の後、御追善の為詔ありて法会を修し給ふ所なり。三代実録曰、元慶六年十二月四日壬寅、清和天皇の御忌、勅して円覚寺えんかくじ、又貞觀寺ちやうくわんじ、水尾等の三寺に使を遣はし功德を修せしむ、円覚貞觀の兩寺に■綿各々四百一十一屯、水尾寺には二百一十一屯、ならび

に御季料を用ゆ」

**福田寺** ふくだんじ 「あたご愛宕山小坂にあり、浄土宗にして、本尊阿弥陀仏坐像二尺五寸、たんけい湛慶の作なり。開基詳ならず」

**後亀山院陵** ごかめやまのあんのみさぎ 「当寺の内西のかたにあり、ごりんせきたふ五輪石塔を建る、又左右二塔あり詳ならず。後亀山院熙成王はごむらかみ後村上天

皇第二の皇子にして南朝の帝なり。南朝文中二年即位す、其後よしの吉野より降したまひ、明德三年十二月入洛し、太上天皇の号を蒙り、北嵯峨さかに閑居し、終に応永三十一年四月十二日崩じ給ふ、御住居の地詳ならず」

**仙翁寺** せんをうじ 「あたご愛宕一鳥居のまへ、せんをう仙翁町の北山下にあり、上古此地に仙人住しなりこうせい後世寺となす。仙翁洞は此山腹にあり、草花の仙翁華は此地よりはじめて生ずるといふ」

**定家卿塚** ていかきやうのつか 「さか北嵯峨平山の南、畠の中にあり、此所に塚あるの由縁詳ならず、とじんやまぶしづか土人山伏塚といふ。此卿の塚所々にあり、後考あるべし」

生六道しやうろくだう

〔清凉寺の戌亥にあり。本尊地藏菩薩、立像八尺、小野篁をの、たかむらの作なり。此地を生六道しやうろくだうといふは、小野篁平生心

にまかせて冥土に往来せり、其行には洛東六波羅らくとうろくはらのひがし六道ちんくわうじ珍皇寺より至り、還にはすなはち此所より現ず、故に名とせり。篁たかむらは常に睡眠を深くせり、此時冥途に魂は至りしと〕

中院観音ちゆうゐんのくわんおん

〔中院町定家卿山莊ちゆうゐんていかきやうざんそうの前、民家会合所に安置す。此本尊は即定家卿ていかきやうの御安持ごあんぢ仏なり。此事近年相知れり、

当町村役にあたる宿老のものへ、其先役より一つの箱を譲り渡す、是むかしよりの例なり。されども此箱を明るものなし。近年の村役あるとき此箱を開き見るに、漢字の文章一通あり、即二尊院にそんゐんの方丈ほうぢやうへ露頭ろとうするに、当町にむかしより安置する所の觀世音くわんぜおんの由来にして、定家卿ていかきやうの御持尊ごぢそんといふ事明白なり、これによつて冷泉家れいぜいけにも聞及び給ひ、為村卿ためむらも駕をめぐらされ拜礼ありて米錢を賜ふ、尚深切に安置すべきよし村老仰を蒙り、今当町右の所に安置す。且又近來に堂宇も建立あるべき催しありとなん〕

西行法師菴跡さいぎやうはふしほりのあと

〔二尊院中門そんゐんちゆうもんのひがし、運善院うんぜんゐんの南菴なんあんの内にあり〕

山家集　をじか鳴小倉をぐらの山のすそ近みたゞ独すむわが心かな

西　　行

辨財天社<sup>べんざいてん</sup>

〔同所龍女池<sup>りうによいけ</sup>のかたはらにあり、龍女を勧請する所なり、由来前編に見へたり〕